Japanese Association for Religious Studies

ヒンドゥータントリズムにおけるチャクラプージャー

井田克征

〈論文要旨〉 ヒンドゥータントリズムの典型ともされるシュリークラ派では、チャクラプージャーと呼ばれる儀礼が行われる。聖なるヤントラに最高女神を勧請し、マントラなどを唱えて供養するというこの儀礼は、より古いいくつかの実践の複合体として形成されたものであり、そしてそれらの実践は、本来は超常力などの現世利益を目的としたものであったことが、同派の古い資料から確認される。しばしば「左道的」「オカルト的」とも形容されるこの古い実践は、時代とともにチャクラプージャーのプロセスの中へと組み込まれていくこととなった。この時、具象的な儀礼行為は瞑想的な儀礼へと置き換えられている。こうした儀礼の複合化と観念化は、YHなどの理論的著作において示された、あらゆる儀礼行為は〈最高女神への帰滅＝解脱〉に他ならないというパラダイムに導かれて発展したものである。そして、このような解脱論の導入は、自分達の「左道的」実践を、より穏健なものへと置き換えることで正統ヒンドゥイズム側からの非難をかわそうという、戦略のひとつとして理解できるだろう。

〈キーワード〉 シュリーチャクラ、タントリズム、女神信仰、プージャー

序論

南アジアのヒンドゥイズムにおいて広く行われる実践の一つとして、プージャー（供養）という儀礼が知られている。それは崇拝の対象に対して、花や水、香などの供物を献供することを中心とするものであり、その起源はヴェーダの宗教で行われていた賓客接待の儀礼にまで遡ることができるという。そこから後期ヴェーダ文献に見られ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

る朝夕の勤行（サンドゥヨーパーサナ）を経て、やがて現在のヒンドゥイズムにも見られるような、神像やリンガを供養の対象とするプージャーへと発展したと考えられる。

このプージャーの執行手順にはセクトごとに多様なヴァリエーションがあるが、中でも十六のプロセスによって構成される「十六作法のプージャー」はつとに有名である。[1] こうした比較的複雑な手順のものから例えば五作法など簡素なものまで、いずれにせよ執行者が神格に対して供物を中心とした様々なサービスを行い、その神格を満足させるという点において基本的な形式は一致する。このようなヒンドゥイズムのプージャーは、ブラフマニズムに見られなかったような「神像に対するより直接的な歓待儀礼の形」をとるものであり、そして「その具象性はヒンドゥイズムにおいて顕著である」と言われている。[2]

このようなプージャーは、正統的ヒンドゥイズムにおいてのみならず、ヒンドゥイズムの中では異端とされることも多いヒンドゥータントリズムにおいてもまた極めて一般的な実践として存在する。しかし正統ヒンドゥイズムにおけるプージャーが、ほとんど常に神像などのイコンを対象とする、直接的な歓待儀礼の形をとるのに対して、タントリズムのそれは、純粋に観想上の神格を供養の対象とするものとなる。タントラ儀礼においては、それを構成するプロセスの多くが、瞑想上の行為へと置き換えられているのである。ここには瞑想を重視して、象徴性の高い儀礼体系を構築したタントリズムの特徴が見出されるだろう。では、このような相違はどこから来たのだろうか。ヒンドゥイズムの新しい潮流として成立したタントリズムにおいて、このような観念的なプージャーが発展したことは、ヒンドゥー儀礼の歴史の中でどのような意義を持つのであろうか。

中世以降の南アジアにおいて、タントリズムと呼ばれる宗教現象が隆盛を極めたことはよく知られている。それ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

は実践的側面から見た場合には、正統ヒンドゥイズムから多くを継承するものと言えるだろう。タントリズムにおいて行われる多くの儀礼は、正統ヒンドゥイズムの儀礼を時に大幅に改変しつつも、基本的にはその多くを踏襲しているのである。そして思想的側面から見た場合には、タントリズムはウパニシャッドなどに示されるような解脱志向に対する、ある種の揺り戻しとして理解できよう。[3] タントラ文献においても解脱の重要性は強調されるが、シャンカラなどのように現世否定的な態度が標榜されることは滅多にない。それどころか、解脱には一定の価値をおきながらもそれと同時に世俗的な欲望の充足、現世利益の享受を追及するのがタントリズムの典型的な態度である。

タントリズムは崇拝する神格に応じて、シヴァ神を崇拝するシャイヴァ、シヴァ神の妃（シャクティ）を崇拝するシャークタ、ヴィシュヌ神を崇拝するヴァイシュナヴァという三つに区分される。そしてシャークタの中でも、特にトリプラスンダリー女神とよばれる神格をシャクティとして崇拝するのが、本稿で扱われるシュリークラ派である。タントリズムの中でも最も代表的な系譜の一つとされるこのセクトは、シュリーチャクラと呼ばれるヤントラを中心とした象徴的な儀礼体系と、それに施される緻密な解釈によって有名である。このシュリークラ派は現在においてもまた南インドやネパールなど多くの地域において信仰されている。

この派では、最高女神トリプラスンダリーに対して、日に三度のプージャーが執り行われる。このニティヤプージャー（日常供養）と呼ばれる儀礼は、いくつもの儀礼要素によって構成される、複雑な儀礼である。[4] 本稿は、このニティヤプージャーを構成している諸儀礼要素の中でも特に中心的な役割を担う、チャクラプージャーと呼ばれる儀礼要素を主題とするものである。シュリークラ派においてこのチャクラプージャーがどのように発展したかそ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

の経緯を探り、そこからさらにタントリズムにおいて行われるプージャーの特質を、正統ヒンドゥイズムにおけるプージャーとの対比の中で探ることとしたい。

周知の通り、タントリズムの儀礼においては多種多様な象徴が用いられる。マントラ（真言）やムドラー（印契）、そしてヤントラなどといった象徴は、そこに様々な解釈が下されることで、儀礼の中できわめて需要な位置を占めることになる。ヤントラとは、一般的には直線や円の集合として描かれる幾何学的図形を指すものとされるが、そこには単なる円や三角形などのシンプルなものから、いくつもの図形が組み合わされたもの、また彩色されてきわめて緻密なディテールを持つもの、あるいは立体的に鋳造されたものなどといった風に多くのヴァリエーションが存在する。本稿において考察の対象となるシュリーチャクラとは、こうしたヤントラの中でも最も有名なものの一つであると言っていいだろう（図1）。このシュリーチャクラは、シュリークラ派のニティヤプージャーにおいて中心的な役割を果たしている。

シュリークラ派の実践者が行う毎日の最高女神の供養（ニティヤプージャー）は、まず祭場を整えて自己や儀礼の道具、座所などを浄化した後、崇拝対象であるトリプラスンダリー女神を、彼女を取り巻いている神格群（アーヴァラナデーヴァター）とともに勧請して、マントラやムドラーなどで彼女らを供養し、また送り出すという流れになっている。この一連の儀礼の中心となる、最高女神らの勧請と供養は、まさにシュリーチャクラを舞台として執り行われるものである。それゆえにこの儀礼要素はチャクラプージャーと呼ばれている。チャクラプージャーにおいて実践者は、目の前に描かれたシュリーチャクラに対して、外側から順番に従属的神格群を勧請し、それぞれ供養していくことになる。そしてこのプロセスが段階的に進んで、ヤントラの中心部に達した時、そこに最高女神

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

が供養される。つまりこの儀礼は、シュリーチャクラの各部分と結び付けられた数多くの神格とそれに取り巻かれた最高女神が、外から中心へ向かって順番に観想されるプロセスとして説明できるだろう。

このチャクラプージャーは、シュリークラ派において現存する最古の聖典『十六のニティヤー女神の海』(*Nityāṣoḍaśikārṇava*[5] 以下NṢA)の中に既にその基本的な枠組みを見出すことができる。そしてこの儀礼は十二世紀以降に著されたNṢAに対する一連の注釈文献や、十三世紀の『ヨーギニーの真髄』(*Yoginīhṛdaya*[6] 以下YH)などを経て次第に複雑化、複合化しつつ、十五世紀成立の『最も優れたタントラ』(*Tantrarāja*[7] 以下TR)においてようやく定型化される。それゆえ本稿では、まずはこのTRに依拠してチャクラプージャーを概観し、その後これに先行する諸テキストを参照して、この儀礼の発展の経緯を辿ることとしよう。

一　シュリーチャクラとは

シュリーチャクラは、下向きの三角形五つと上向きの三角形四つを組み合わせて形作られる四十三個の小さな三角形と、それを取り囲む八弁および十六弁の二重の蓮の花弁、そしてその外側を取り囲む四つの門を備えた三重の囲いによって構成されている(図1)。この図形は、外側から順に同心円状の九つの部分に区分されるが、その各部分はチャクラ(輪、囲い)と呼ばれる。本稿でもこのヤントラ全体に対してはシュリーチャクラ、区分された各部分に対してはチャクラという呼称を用いることとする。

この九つのチャクラには、外から順に次のような名前が付けられている(TR 5. 9-11ab)。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

［場所］	［チャクラの名称］
一　外側を囲む三重の線	三界を惑わすチャクラ
二　十六弁の蓮	一切の願望を満たすチャクラ
三　八弁の蓮	一切を動揺させるチャクラ
四　十四個の三角	一切の吉祥を授けるチャクラ
五　外側の十個の三角	一切の果報を達成させるチャクラ
六　内側の十個の三角	一切からの守護をなすチャクラ
七　八個の三角	一切の病を払うチャクラ
八　中央の三角	一切の成就を授けるチャクラ
九　中心の点（ビンドゥ）	一切の歓喜からなるチャクラ

以上のような九つの部分からなるシュリーチャクラは、一連のプージャーの中ではトリプラスンダリー女神とそれに随従する女神達が勧請される場として考えられている。勧請された神格達は、シュリーチャクラの各部分を座としてそこにとどまり、その後の供養を受けるのである。このようにシュリーチャクラを女神の座所とする考え方は、儀礼文献を離れても例えば『ラリター女神の物語』（*Lalitopākhyāna*[8] 以下 LU）などにおいて神話的な形をとって表出されている。そこでは多くの取り巻きの女神達（アーヴァラナ）の配置されたシュリーチャクラが、まさに最高女神の住まう宮殿として、あるいは女神の乗る戦車として描写されている（LU 19. 1-60）。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

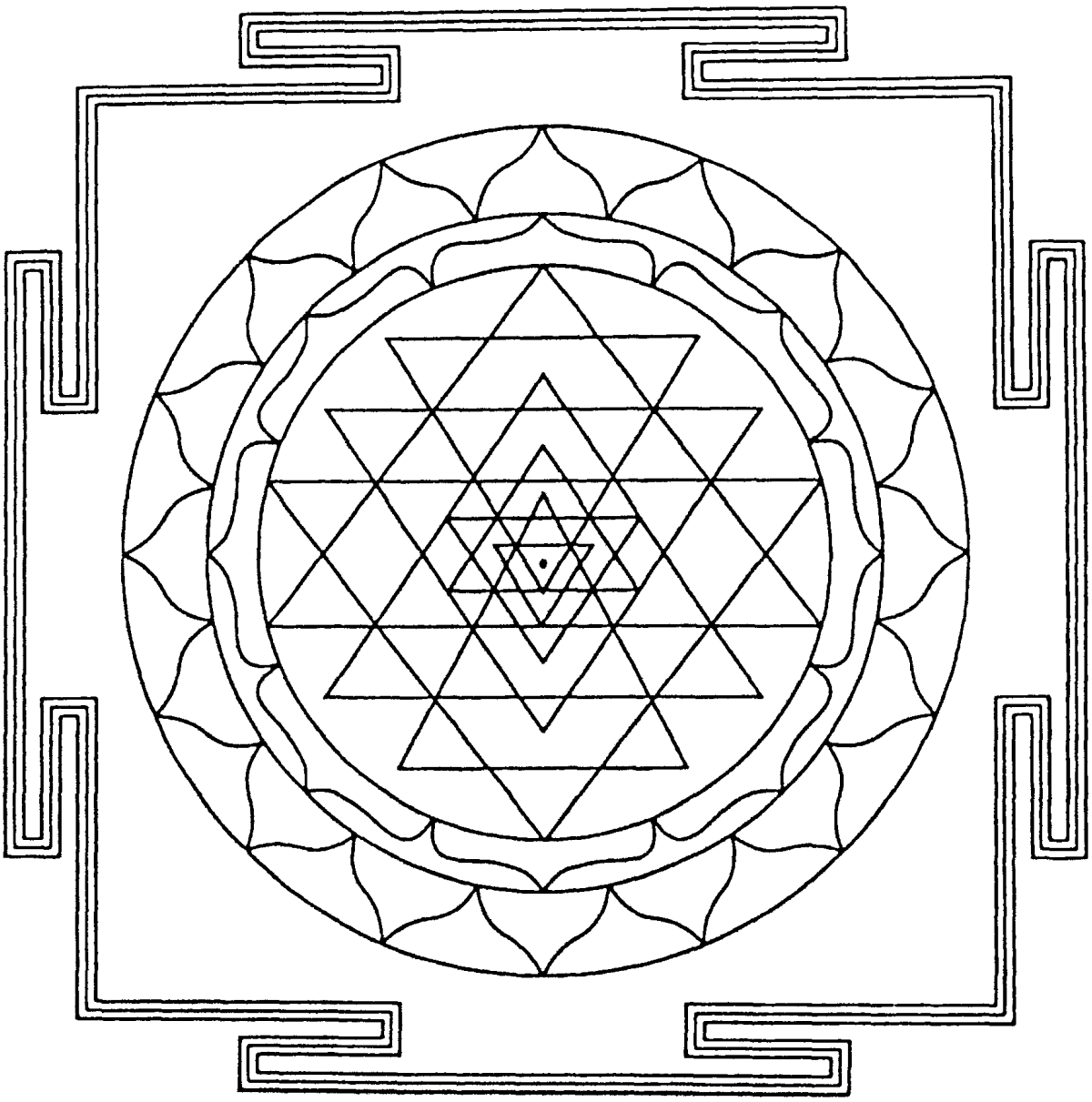

図1　シュリーチャクラ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

二　TRにおけるチャクラプージャー

シュリーチャクラに数多くの神格群を勧請し、供養するというこのチャクラプージャーの具体的なプロセスは、TRの第五章に詳しく述べられている（TR 5. 41-53）。それをまとめると次のようになる。

1　第七のチャクラの上方に、伝説上の九人の師（ナータ）を勧請し、供養する。
2a　第一のチャクラにブラーフミーなど八女神と、アニマーなど十女神を勧請して、供養する。
2b　「一切を動揺させるムドラー」を結び、第一のチャクラの主宰女神トリプラーを供養する。
3a　第二のチャクラにカーマーカルシニー（欲望を惹きつける者）などの十六女神を勧請し、供養する。
3b　「一切を追い散らすムドラー」を結び、第二のチャクラの主宰女神トリプレーシュヴァリーを供養する。
4a　第三のチャクラにアナンガクシュマー（カーマ神の花）などの八女神を勧請し、供養する。
4b　「一切を魅了するムドラー」を結び、第三のチャクラの主宰女神トリプラスンダリーを供養する。
5a　第四のチャクラにサルヴァサンクショービニー（一切を動揺させる者）など十四女神を勧請して、供養する。
5b　「一切に幸福を与えるムドラー」を結び、第四のチャクラの主宰女神トリプラヴァーシニーを供養する。
6a　第五のチャクラにサルヴァシッディプラダー（一切の成就を授ける者）など十女神を勧請し、供養する。
6b　「一切を酔わせるムドラー」を結び、第五のチャクラの主宰女神トリプラシュリーを供養する。
7a　第六のチャクラにサルヴァジュニャー（一切を知る者）など十女神を勧請し、供養する。
7b　「一切の偉大なる鉤棒であるムドラー」を結び、第六のチャクラの主宰女神トリプラマーリニーを供養する。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

8a　第七のチャクラにヴァシニーなど八女神を勧請し、供養する。

8b　「一切をケーチャリー（空を飛ぶ者、あるいは解脱者）にするムドラー」を結び、第七のチャクラの主宰女神トリプラシッダーを供養する。

9　第七のチャクラの内側に四種の武器を勧請し、供養する。

10a　第八のチャクラにカーメーシュヴァリーなど三女神を勧請し、供養する。

10b　「一切の種子であるムドラー」を結び、第八のチャクラの主宰女神トリプラーンバーを供養する。

11a　第九のチャクラにトリプラスンダリー女神を勧請し、供養する。

11b　「一切の起源であるムドラー」を結び、第九のチャクラの主宰女神である偉大なるトリプラスンダリーを供養する。

師の供養（儀礼1）と武器の供養（儀礼9）という二つの例外を除いて、[9] このチャクラプージャーは、シュリーチャクラを構成する九つのチャクラを外から中心へ向かって連続的に進行する。そしてこの段階的なプロセスの各々は、アーヴァラナのプージャー、つまり最高女神およびそれを取り巻く従属的神格群の供養（2a～11a）と、ムドラーによる各チャクラの主宰女神の供養（2b～11b）という二種類の儀礼要素を並行的に行うものとして構成されている。

この二種類のうちでも、アーヴァラナの供養は、第一のチャクラにおいて二つの神格群が述べられているという点を除けば、あとは例えば第八のチャクラの十六弁に対して十六体の女神が勧請されるなどというように、図形の形に即した数の神格が規定されている。この一連の供養によって、シュリーチャクラは最高女神と彼女に随従する

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

アーヴァラナによって満たされることになる。

そしてアーヴァラナの供養と並行して、九つのチャクラの主宰女神（チャクレーシュヴァリー）に対して九つのムドラーを結んで供養する、いわゆるムドラー儀礼が行われる（TR 5. 44-45ab）。この儀礼要素は、九つのチャクラにそれぞれ位置している主宰女神九体に、それぞれ規定されたマントラを黙唱（ジャパ）し、規定されたムドラーを結ぶという形をとっている。

以上の二群の儀礼要素を、九つのチャクラのそれぞれにおいて並行して行いながら、供養のプロセスは次第に内側へと進行する。そして全てのアーヴァラナとチャクラの主宰女神達を供養し終えた後、シュリーチャクラの中央に位置する第九のチャクラにおいて、最高女神トリプラスンダリーが供養される。これこそが一連のニティヤプージャーの中でも最も重要な瞬間と言えるだろう。この最高女神の供養の後、いくつかの瞑想を経てチャクラプージャーは終了する。そしてこの後にはホーマ儀礼やバリ供養などの儀礼要素が任意に行われ、ニティヤプージャーは終了する。

三　複合的儀礼としてのチャクラプージャー

TRに見られるチャクラプージャーは、以上のように外側から内へと段階的に進行する。しかしこの一連のプロセスの中には、師の供養（儀礼1）や武器の供養（儀礼9）といった例外的な要素が組み込まれており、そして内へと向かうプロセス自体もまた、先に示したようにa群とb群との複線構造を示している。このようなチャクラプージャーの構造は、それがいくつかの儀礼の複合体として形成されたものであると考えることで説明がつく。TR

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

のチャクラプージャーは、大ざっぱに言って三つの異なった要素から構成されているのである。

既述の通り、TRのチャクラプージャーの中では、アーヴァラナの供養（儀礼2a～11a）とムドラー儀礼（儀礼2b～11b）とが並行して行われる。これはYHを含めた十三世紀以降の資料においておおむね一致しており、そこから現代に至るまで一般的なチャクラプージャーの形態であった。しかしシュリークラ派の古い姿を伝えるNṢAの第一章において、「一切を動揺させるムドラー」にはじまる九つのムドラーは、チャクラプージャーの終了した後に結ばれるものとされている（NṢA 1. 183-185ab）。この資料に見られるチャクラプージャーは、アーヴァラナ神格群の供養を中心としており、ムドラーや、チャクラの主宰女神の供養を含んでいない。九つのムドラーの実践は、チャクラプージャーが終わった後に独立して行われるのである。さらに興味深いことに、この九つのムドラーの実践は、それを行った者に「微小さ（アニマー）」など九つの超常力を獲得させるとされている。ムドラーを結ぶことで獲得される九つの超常力は、TRなどのチャクラプージャーにおいて第一のチャクラに配置される二つの神格群のうちの片方（アニマー女神など）と同じ名前を持っているが、これについては後に触れる。

超常力をもたらす九つのムドラーの実践は、さらに同じNṢAの四章にも、独立した実践として言及されている（NṢA 4. 65）。そこでもまた、九つのチャクラに対応付けられた九つのムドラーを結ぶことで九つの超常力が獲得されることが説かれている。NṢAにおいて九つのムドラーは、特定の神格を供養するためというよりは、むしろ超常力を獲得するために行われる成就法の中で用いられる。これに類する例は、シュリークラ派以外のシャークタの文献にも、いくつか見出される。このような超常力との結びつきを暗示するかのように、九つのムドラーも、そしてそれと対応付けられる九つのチャクラも、調伏や増益などに関係するような名前が与えられている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

N.SAにおけるチャクラプージャーはムドラー儀礼を含まず、単に外から内へとアーヴァラナデーヴァターを供養していくものであった。しかもN.SAの古いヴァージョンでは、第一のチャクラにはブラーフミーなどの八女神のみが勧請され、アニマーなどの十女神は現れない。[10] つまり本来のN.SAのチャクラプージャーは、九つのチャクラに対して九グループのアーヴァラナ女神を勧請する、きわめて単純な構造の儀礼であったことが理解できよう。

しかしN.SAに見られるこうしたシンプルな形のチャクラプージャーは、やがてムドラー儀礼と結び付けられることになる。十三世紀のYHにおいて、すでにムドラーによるチャクラの主宰女神の供養がアーヴァラナデーヴァターの供養と並行的に行われている。こうして、N.SAでは単なる成就法としてしか述べられなかったムドラーの実践が、これ以降のテキストにおいては、チャクラプージャーの一部をなすものとして、最高女神トリプラスンダリーの供養のプロセスの中に位置を占めるようになる。これに伴って、第一のチャクラにはブラーフミーなど八女神に加えてアニマーなどの十女神が勧請されるようになる。九つのムドラーがチャクラの主宰女神と関係付けられて統合されたのと同じように、そのムドラー儀礼の果報であった「微小さ（アニマー）」など九つの超常力もまた、神格化されてシュリーチャクラの外郭部に組み込まれたのである。

九つのムドラーの実践は、本来このようにチャクラプージャーと別個の実践であったと思われる。しかしこのN.SAが述べる九つのムドラーを含まないチャクラプージャーが、それだけで一枚岩であるかと言えばそうではない。

このN.SAのチャクラプージャーにおいて供養されるアーヴァラナ達には、ほとんど全てに最高女神の特性や能力に関連した名前が与えられている。そしてこの最高女神の部分的神格達は、中心へ向かうにしたがって最高女神

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

自身のより重要な側面を示すように、シュリーチャクラの中に階位的に配列されている。ここには後述するようなシュリーチャクラを最高女神から発現した聖なるエネルギーの展開と理解する、この派の神学理論が表されているのだと言えるだろう。

しかしこのような連続的な神格の配列は、第七のチャクラにおいて断絶する。このチャクラに配されるヴァシニーなどの八女神は、例えばその前の第六のチャクラにおけるサルヴァジュニャー女神（一切に関する知を持つ者）などや、第五のチャクラにおけるサルヴァシッディプラダー女神（一切の成就を授ける者）など、最高女神の部分的神格として理解されるアーヴァラナデーヴァターとは明確に異なっている。ヴァシニーなど八女神には、それぞれに固有の種字マントラが与えられており（NṢA 1. 77-95; TR 4. 13-20）、単にシュリーチャクラに配置されるだけである他のアーヴァラナデーヴァターよりは、はるかに独立した性格を持っている神格なのである。

さらにNṢAやそのほか多くの資料において、第七のチャクラにヴァシニーなど八女神を供養した後、その内側つまり中央の三角（第八のチャクラ）を取り囲むようにして、矢・弓・索縄・鉤棒という四種の武器を供養することが述べられる（NṢA 1. 179-180; TR 5. 47）。これらは実にシュリークラ派の主尊であるトリプラスンダリー女神が四本の腕に持つ四種の武器に他ならない（NṢA 1. 144-145）。

武器の供養の後には、第八のチャクラの三つの角それぞれにカーメーシュヴァリーなどの三体の女神、そしてその中心点である第九のチャクラにおいて最高女神が供養される。カーメーシュヴァリーなどの三女神と最高女神トリプラスンダリーを合わせたこれら四体の女神は包括して聖地の女神と呼ばれ、この派において重要視される四大聖地と対応付けられている（YH 1. 41）。さらにこれらの女神は、四人の伝説上の師と対応付けられもする

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

(*Subhagodaya* 61)。このように第八のチャクラ、すなわち中央の三角形において供養される三体の女神は、常に最高女神と同一のグループを構成しており、最高女神の異なった姿でのあらわれ、最高女神と代替可能な存在として理解されている。つまりこの三角形の中に勧請されるのは、まさに最高女神それ自身の四つの姿に他ならない。この三角形の周囲には、前述の通り四種の武器が配されるが、これを四本の腕に四つの武器を持ったトリプラスンダリー女神そのものの象徴と考えてもいいだろう。そして中央の三角形の周囲をヴァシニーら八体の女神達が取り巻いている。このように最高神とそれを取り巻く八体の守護的神格というイメージは、タントラ的な実践の中ではきわめて広く見出されるものである。(11)

シュリークラ派では、ビンドゥを伴ったこの中央の三角形とそれを取り囲む八つの三角形、つまり第七から第九のチャクラを取り出して、それにナヴァヨーニチャクラ（九つの三角からなるチャクラ）という名称を与えて重要視している（図2）。この派の聖典において、ナヴァヨーニチャクラはまさに偉大な、あらゆるチャクラの真髄として考えられるべきものとされている（YH 1. 15）。ヴァシニーなど八女神に取り巻かれ、四つの武器を持った最高女神を象徴しているこのナヴァヨーニチャクラは、シュリーチャクラの中核部分であると同時に、それだけで一つの完結した宇宙図としても機能する独立したヤントラと理解される。(12)

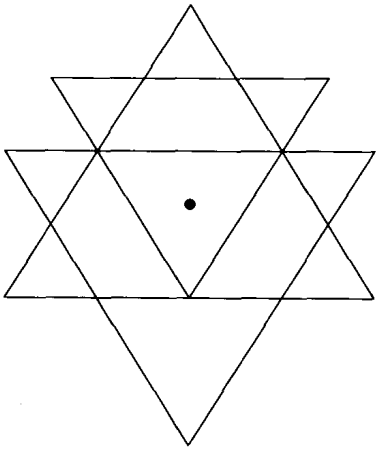

図2　ナヴァヨーニチャクラ

このナヴァヨーニチャクラを用いた実践が、やはり*NSA*に見出される。それは、ナヴァヨーニの中央の三角にカーマカラーと呼ばれる種子マントラ*īm*を、そしてそれを取り巻く八つの三角にそれぞれヴァシニーなど八女神

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

の種子マントラを配した後、このチャクラを自己の身体内の基底部にあるものとして瞑想するなら、自分自身がカーマ神に等しくなるという実践である（NSA 4. 58）。

そもそもチャクラプージャーにおいてナヴァヨーニの周りに配されるトリプラスンダリー女神の四つの武器は、一般的には愛欲の神カーメーシュヴァラの持ち物として知られるものである。ナヴァヨーニにおいて想起される場合の最高女神は、カーメーシュヴァラ神とペアをなすカーメーシュヴァリー女神としての側面を強く示している。このことと対応するように、ナヴァヨーニの瞑想はほとんど常に女性の魅了をもたらす実践として言及されている。この種の実践はNSAの第二章に多く見出される。

このようにカーメーシュヴァラ／カーメーシュヴァリーの崇拝としての側面を示すナヴァヨーニの供養は、おそらくNSAよりも前の段階でアーヴァラナの供養と結びついてこの派のチャクラプージャーを形成したと思われるが、両者の本来の文脈の相違は明らかである。どちらも最高女神を取り巻く女神達の表象としてチャクラを供養するものではあるにしても、ナヴァヨーニが常に愛欲に関わるような呪術的実践の中で問題となるのに対し、アーヴァラナはより日常的な供養と関係している。実際のところ、毎日行われるニティヤプージャーの文脈を離れると、これらアーヴァラナ神格群が問題とされる場面はほとんど存在しないのである。

このことから、次のような推論が成り立つだろう。シュリークラ派は自分達の儀礼体系を確立するに際して、当時さまざまな呪術的な実践において用いられていたシュリーチャクラを採用し、それを最高女神のプージャーの中に導入した。そしてこれに伴って、ヤントラの形状に合わせた今のようなアーヴァラナデーヴァターが採用されたのであろう。[13] そしてナヴァヨーニの瞑想やムドラー儀礼などといった呪術的傾向の強い実践もまた、次第にその中

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

に統合され、現在のチャクラプージャーが形成されるに至った。

四　シュリーチャクラの神学的解釈

チャクラプージャーは、最高女神とそれを取り巻くアーヴァラナの供養を中心とし、そこにムドラー儀礼などが重層的に組み込まれることでより複雑な儀礼へと発展していった。こうした複合化の過程においては、解脱志向性の強いこの派の神学理論が主導的な役割を果たしたと思われる。

YHに典型的に示される解脱中心的な儀礼論において、シュリーチャクラは、この派の展開論的な世界観と結びつけられて解釈される。この派の理論家達は、現象世界の一切を唯一絶対なる最高女神からの展開によって顕現したものと考える。それゆえ個我をも含めたこの世界の一切は、究極的には世界原理たる最高女神の物象的なあらわれに他ならない。この場合、一切の根源としての女神への回帰こそが解脱であるということになるだろう(*Kāmakalāvilāsa* 36)。

このような解脱観の中で、シュリーチャクラは、最高女神から次第に粗大化しつつ展開するこの世界を表象しているある種の階梯、「図形的な宇宙像」[14]として考えられている。そしてこのシュリーチャクラが内から外へとむかって、宇宙の開闢のプロセスをなぞるものであると考えられるならば、反対にそれを外から内へと辿るプロセスは、まさに世界の宇宙の起源への回帰として理解されることになる。第一のチャクラから始まる九つのチャクラにおいてそれぞれ神格を供養しつつ、最終的に最高女神へと到達するこのチャクラプージャーは、まさに解脱を象徴的に再現するものに他ならない。このような儀礼観を示すYHなどの著作において、シュリーチャクラを用いる

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

実践は常に解脱を獲得するための手段として説明されるようになる。

そしてシュリーチャクラにこうした意味が与えられる時、それを用いた実践には全て解脱へ向かう実践として解釈される可能性が生じてくる。NṢA などでは呪術的な成就法に過ぎなかった多くの実践は、こうした観念のもとに再解釈され、それらは本質的に等価なものとして理解されるに至った。つまり一切の儀礼は解脱へのプロセスとして本来的に等しく、完全なのである。この考え方に基づいて、本来はより現世利益的、呪術的な性格を有していた実践がチャクラプージャーの中に統合されていった。TR におけるそれは複合儀礼としてのチャクラプージャーの一つの完成形を示していると言えるだろう。

五　考察

シュリーチャクラは、シュリークラ派の儀礼の根幹をなすものとして、この派の実践において常に中心的な役割を果たして来た。この図形は古くはインドネシアの七世紀の碑文に既に見出されるというが[15]、現存するサンスクリット語の資料からは古くても十世紀前後にまでしか遡れない。つまりシュリークラ派の成立期においてシュリーチャクラがどのように扱われたかを示す資料は、今のところ存在しないのである。それでも以上の議論から大まかな見通しを示す程度のことはできるであろう。

NṢA などの古いテキストは、シュリーチャクラを超常力をもたらす成就法としばしば結び付けている。そのような実践は、*Kulārṇava* などのシュリークラ派以外の古いタントラ文献にも散見される[16]。つまり少なくとも十世紀頃までのカウラ派およびその強い影響下に成立したシュリークラ派を中心として、シュリーチャクラが呪術的な

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

実践に用いられる有力なヤントラとして知られていたことには疑いがない。

しかしその一方で、NSAはシュリーチャクラを用いた日常的なプージャーをも述べている。シュリーチャクラの各部分にアーヴァラナを勧請し、供養するというシンプルなチャクラプージャーは、NSAにおいて日常的に行われる女神の供養としてのみ理解されている。そこには後のYHのような解脱論的解釈は全く示されていないのである。アーヴァラナを伴った最高女神のプージャーは、シュリーチャクラを用いるという点を除けば、他のセクトとも共通する、きわめて一般的なものと言えるだろう。さらに付言すれば、こうした神格の歓待としてのプージャーは、正統ヒンドゥイズムにおけるプージャーと通底するものである。

NSAの時点でチャクラプージャーは単なる最高神の供養であり、そしてこれとは別にシュリーチャクラを用いた無数の呪術的な実践が存在した。こうした状況は十二〜十四世紀にかけて次第に変化していくことになる。本来は現世利益をもたらすために行われていた呪術的な実践が、チャクラプージャーの中に統合されていったのである。それを牽引したのは、一連のNSAの注釈文献やYHに示されるような解脱志向と、その前提となった世界の展開論であったろう。それらのテキストは、カシュミールシャイヴァの理論的影響下に成立し、シュリーチャクラを用いた様々な儀礼要素の統合と、それらの儀礼要素の解脱論的な再解釈を進めたのである。こうした趨勢の中で、プージャーは単なる神格の歓待を超え、実践者に解脱をもたらす実践として解釈されるようになる。そしてその中に統合された個々の儀礼要素は、かつて担っていた呪術的な意味合いを失っていった。このようにプージャーが解脱論的に解釈され、遍在する女神と自己との一体化のプロセスとしてきわめて観念的に捉えられる時、その実践の対象としての神像や、具象としての水や花などの供物はもはや必要とされはしない。それどころか、一切の儀

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

礼は瞑想と代替可能とすら考えられるのである。

ここで冒頭の問いに話を戻そう。正統ヒンドゥイズムにおけるプージャーが具象的なものであるのに対して、タントリズムにおけるそれは、きわめて観念的な性格を持っている。このことは、タントリズムにおいて儀礼がそのままに解脱論的世界観と直結することを直接的な理由としているだろう。正統ヒンドゥイズムの歴史の中で、多くの思想家が儀礼と解脱、そして行為と知識の関係を考察してきた。これはつまり実践と理論との関係とも言い換えられようが、そうした問題はタントリズムにおいてもまた重要な考察の対象であった。そしてタントリズムにおいては、そうした行為（儀礼）そのものが解脱のパラフレーズに他ならないという観念が示されたのである。

しかしこういった儀礼の解脱論的解釈が、タントリズムにおいてのみあらわれ、そして儀礼を具象から観念世界へと向かわせたというのは、どのような事情によるものだろうか。正統ヒンドゥイズムにおいては、日々行われる儀礼は儀礼としてそのままに行われ、その伝統の中で生み出された先鋭的な理論体系、つまり一切の行為、儀礼を否定するような解脱主義などは、こうした実際との乖離を決定的な形で埋めることはできなかった。したがって、解脱論こそがタントリズムにおける日常的な儀礼を瞑想的なものへと変容させる原動力となったと言うだけでは、十分ではないだろう。

ここで我々はかつてシュリーチャクラが多くの呪術的実践と結び付けられていたという事実を思い出すべきである。タントラ儀礼は、その多くの形式において正統ヒンドゥー儀礼を継承するが、しかしそれと同時に必ずしもサンスクリット文献に示されていないような、土着的な、そしてしばしばオカルト的な実践をも内包している。深夜の墓場で行われるそうした実践は、神格や屍鬼、精霊を呼び出して依代に憑依させたり、またヤントラに留まらせ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

たりするようなものである。この種の実践には、時に死体や血などの不浄な要素が用いられ、[17] まさにタントリズムが異端として排斥される大きな要因となった。それゆえにこうした「左道的」実践は、かなり早い時期から、実際には行われない空想的なものへと読み替えられるようになっていた。NSA などの文献に見られるのは、そうした穏健化がある程度進んだ後の成就法として理解されるべきものであろう。

このように具象的な儀礼を瞑想へと置き換える傾向は、タントリズムにおいてかなり早い段階から存在していた。タントラ儀礼はその構成要素を次第に観念的なものへと変えていくうちに、ある時期からそれを解脱論の中で解釈するようになったと思われる。この結果として、かつて「左道的」実践で知られたタントラ儀礼は、より「清浄な」要素からなる儀礼へと転化していく。このような穏健化は、タントリズムが正統ヒンドゥイズム側からの忌避、非難をかわすためのひとつの必然であったとも言えるだろう。その結果、タントリズムは全インド的に展開し、正統ヒンドゥー思想の牙城とも言えるシュリンゲーリにおいてすら、その強い影響の下にある。さらに現代の南インドにおけるシュリークラ派の支持者は、その多くがリグヴェーダのシャーキャに属しているという。このようにしてタントリズムは正統ヒンドゥイズムへと回帰するのである。

注

(1) M. Tachikawa, "A Hindu Worship Service in Sixteen Steps, Shoḍaśa-upacāra-pūjā" (『国立民族学博物館研究報告』第八巻一号、一九八三年)、一〇四―一八六頁。M. Tachikawa, S. Hino, L. Deodhar, *Pūjā and Saṃskāra*, Mottilal Banarsidass Publishers, 2001.

(2) 井狩彌介「南インドのヒンドゥ寺院の構造と儀礼」(『仏教芸術』一五六、一九八四年)、一一四頁。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

(3) 高島淳「タントリズム」(『岩波講座　東洋思想　第六巻　インド思想二』岩波書店、一九八八年)、一四四―一四五頁。

(4) この儀礼の全体的な構成に関しては、井田克征「『タントララージャ』におけるホーマ儀礼」(『社会環境研究』八、二〇〇三年)、一五頁。

(5) V. V. Dviveda (ed.), *Nityaṣoḍaśikārṇava with Two Commentaries Ṛjuvimarśinī by Śivānanda and Artharatnāvalī by Vidyānanda (with Appendix: Tripurasundaridaṇḍaka of Dīpikanāthasiddha and Subhagodaya, Saubhāgyahṛdayastotra and Subhagodayavāsanā of Śivānanda, and Saubhāgyasudhodaya and Cidvilāsastava of Amṛtānanda)*, Yogatantra-granthamālā 1, Sampurnanand Sanskrit University, 1968; M. Kaul (ed.), *The Vāmakeśvarimata with the Commentary of Rājanaka Jayaratha*, Kashmir Series of Texts and Studies 66, Śrinagar, 1954. 本稿ではDvivedaによる刊本を底本とし、偈の番号もそれに従う。

(6) V. Dviveda (ed.), *Yoginiḥṛdaya*, Motiral Banarsidass Publishers, 1988.

(7) L. Shastri (ed.), *Tantrarājatantra*, Motiral Banarsidass Publishers, 1981.

(8) J. L. Shastri (ed.), *Brahmāṇḍapurāṇa of Kṛṣṇa Dvaipāyana Vyāsa*, Motiral Banarsidass Publishers, 1983.

(9) この派の伝説的な始祖である九人の師を第七のチャクラの上部に勧請して、供養するこの儀礼プロセスは、テキストによって師の数を異にしながらも、NṢAからTRに至るまで一貫して述べられる。一般的に、この種の師の供養はプージャーの冒頭において、その後の障害を除くために行われるのが普通である。この供養が第七のチャクラにおいて行われるということは、後述するナヴァヨーニチャクラの独立性を支えるもう一つの材料となるだろう。

(10) NṢAに対する現存する最古の注釈 *Vivaraṇa* は、アニマーなど十女神に言及しないNṢAを知っている。しかし後代の注釈文献が知るNṢAは、それらの女神に冠する言及を含んでいる。

(11) 例えばシュリークラ派に直接的な影響を与えたカウラ派のテキストにおいて、クレーシュヴァリーとクレーシュヴァラという姿をとったシヴァ神とそのシャクティと、それを取り巻く八女神という形で見出される(*Tantrāloka* 29. 225 ff.)。P. Mishra (ed.), *Śrī Tantrāloka of Mahāmaheśvara Śrī Abhinavagupta pādācārya with Two Commentary Viveka by Ācārya Śrī Jayaratha Nilakṣira Viveka by Dr. Paramhans mishra Hans*, Yogatantra-Granthamālā 17, 8 vols., Sampurnanand Sanskrit University, 1992-99.

(12) このナヴァヨーニチャクラは、身体の八つの構成要素と対応付けられ、それ自身が女神の身体と解釈されることもある(*Kāmakalāvilāsa* 40)。J. Woodroffe (ed.), *Kāmakalāvilāsa by Puṇyānanda-nātha with the Commentary of Natanānanda-*

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

nātha, Ganesh & Co., 1971.

(13) タントリズムに属する他のセクトにおいても、プージャーの際には最高神がアーヴァラナを伴うことが多いが、その場合のアーヴァラナの数や名称、配置などはセクトごと、テキストごとにきわめて多種多様な形態をとる。

(14) A. Padoux, "The Śrīcakra according to the First Chapter of the Yoginīhṛdaya," *Maṇḍalas and Yantras in the Hindu Traditions*, Brill's Indological Library 18, Brill, 2003, p. 240 参照。さらに彼は同じ箇所で次のように述べている。「シュリーチャクラを構成するこの九つの部分は、女神の聖なる力の展開と見なされる。そこには、彼女から発現し、彼女の随員をなす、全ての様々な彼女のエネルギーやあらゆる神格が住している。」

(15) M. C. Joshi "Historical and Iconographic Aspects of Śākta Tantrism," *The Roots of Tantra*, State University of New York Press, 2002, p. 50.

(16) 例えばそれは *Kulārṇava* の第十章に見出される。T. Vidyāratna (ed.), *Kulārṇavatantra*, Motiral Banarsidass Publishers, 1965; C. Malaviya (ed. and tr.), *Kulārṇavatantram* (*Ūrdhvāmnāyatantrātmakam*) *with Kalāṇī Hindi Commentary*, Krishnadas Academy, 2001.

(17) それは *Kulacūḍāmaṇi* の第六章 (A. Avalon (ed.), *Kulacūḍāmaṇi Nigama*, Ganesh & Co., 1956)、*Kulārṇava* の十六章などに見てとれる。

＊本研究は、財団法人日本科学協会の平成十六年度笹川科学研究助成を受けて行われた。

NII-Electronic Library Service